

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 54 号

2005 年 10 月



磐梯山外来植物観察会

8 月 28 日（日）に第 78 回自然観察会・磐梯山外来植物観察会を行いました。参加者は 24 名でした。今回の観察会は外来植物の観察が目的でしたが、幸い外来植物はほとんど見られず、思いもかけず多くの磐梯山の野生の花を観察することが出来ました。登り始めにハナイカリが早速現れました。70 回を越えるこれまでの観察会で始めて出会った花です。短い急登をしのいで尾根に出ると、赤い実をたわわにつけたアキグミの大木が。背後には岩肌をむき出しにしたアルペン的な磐梯山の前衛峰がダイナミックに聳え立ちしばし感嘆。なだらかな登山道を進むと、オニルリソウ、ホタルブクロ、ヤマホタルブクロ、エゾシロネなどの花が次々と



ハナイカリ

現れ、ヌマガヤで被われた湿原周辺ではタチアザミやミヤマシャジン、ウメバチソウなどの花に混じり赤い果実をぶら下げたタケシマランなども観察されました。



ミヤマキンバイ

ミヤマハンノキに被われたガレ場を登り始めるとコエゾゼミが岩に……。程なく櫛ヶ峰からのやせ尾根に飛び出し、小休止。裏磐梯の眺望を楽しみ、再び登っていくと、季節風が厳しいのかミヤマダイモンジソウ、ミヤマキンバイが咲いていてしばし感嘆。キオンの群落が発達した急斜面を登りきると、弘法清水直下のお花畑に到着。ここで昼食タイムとなりました。お花畑ではタカネナデシコ、クロトウヒレンなどの珍しい花を観察することができ、大満足の観察会でした。

2001 年 2 月 4 日、土湯「思いの滝スノーシューで歩く」に参加以来ズーッとご無沙汰でした。いつものようにそれぞれの車に便乗させて頂き、登山口に集合。その合間に、ヒメジョオンとハルジオンの区別を鎌田さんに教わり、いざ出発。登り始めて間もなくハナイカリに出会う。私は始めて出会ったので、今日の収穫の第一号でした。以前来た時と違って、登り始め間もなくの急道は土が流れないように丸木で一部補修されていた。あまり利用されていないこんな所でも目が行き届いているのだと思った。自然そのままが一番いいのだけれど、これだけ登山ブームになり人が大勢入るようになった今日、山を守る意味では手を加えることも必要な時もあると思った。

道々に花を見つけては一つ一つの花に時間をかけて観察し、語り合い、ある人は高級なレンズで、ある人は 100 円のレンズでそれぞれのレンズを通して、高山植物特有の小さな花のかわいさがよけい印象的でした。ホタルブクロとヤマホタルブクロがある事もこの参加で知り、たまたま近くに 2 種類があったので、よく違いを観察する事が出来、とてもラッキーでした。またアキグミを見つけなるべく熟しているものを摘んでみましたが渋さだけが残し、甘いグミを食することは出来ませんでした。ちょっと早すぎたようです（グミばかりに気をとられ、足元にネジバナが咲いていたのに皆、気がつかず、帰りを見つける）。

頂上に向かうにつれガスがかかってきてお花畑の所の丸木に横一列になって座り、昼食をとる時には雲が降りてきて、汗ばんだ体が少々冷えてきた。それでも下のほうからいろいろ食物が回ってきて、おいしかったです。どなたからの差し入れか分かりませんが、この場を借りてごちそうさまと申し上げます。そして再び同じ道を下り、上から沼がしっかり見えた風景はとっても美しかったです。以前も何度かこの沼を見ているけど、その度に水の量が違っているようです、なぜなのか？テーマは帰化植物の観察ということでしたが実際に登山口から出会ったのはヒメジョオン、シロツメクサでした。車中からはオオハングンソウが見られました。そもそも帰化植物とは江戸時代前に入ってきた



ミヤマダイヤモンドジソウ

ものは在来種で、明治時代以降に入ってきたものをいうそうです。これも今回の大収穫のひとつです。

帰りに少々、車がトラブってしまいましたが、これもまた山の思い出のひとつとなって残るでしょう。会員の皆さんありがとうございました。特にドライバーの皆様、改めてご苦労様でした。



タカネナデシコ



オニルリソウ



西大巔登山道調査とロープ補修に参加して

山登り1年生 菅野 春美



初めての飛び入り参加でしたが、とてもさわやかな気分を味わうことができましたこと、まずは感謝申し上げます。(花の名前も少し覚えることもできました。)

当日の朝の福島は小雨交じりでしたが、土湯峠を越えるとおてんとう様が。峠を越しただけでこんなにも違うなんて。更に登った西大巔の山頂からは方々の山と青空、雲海と磐梯山の山頂ちょっと覗かせておりました。白い「ちんぐるま」などが沢山咲いて私はレイチェル・カーソンの有名なあの一説(「*The Sense of Wonder*」)を思い、自分の周囲の大きさに全く自分を意識しない心境に陥るのです。全く気持ちのいいものです。

今までの山では景色にばかり気をとられ、人工物のトラロープに全く気にしなかった私でしたが、今回初めて歩道のロープ補修のお手伝いをさせていただきました。目線をかえて、体験して、気がつくもの、得られるものも多さに改めて気がつくのです。

最後に、登りで目にしたコーヒー牛乳バック(ゴミ)、2週間近くたった今でも拾うべきであったとチクチクいたします。

大波 紀子



ヒナザクラ

今回は「西吾妻のロープ補修」とのことでしたが、作業のほうは何を手伝ってよいのかわからないまま、トラロープの端っこを握っていただけでした。

今まで登山道脇のロープについて深く考えたことはありませんでしたが、1本のロープを張ることによって登山者が不用意に山道から外れることを防ぎ、そのようなロープは今回のような地道なボランティア活動で補修されていることを知りました。足元で風に揺られている白色や黄色の花々は微妙なバランスでここに咲くことが出来たのでしょう。

福島市を出発したときは小雨交じりの厚い雲をうらめしく感じておりましたが、山頂は日差しを強く感じるほどの快晴でした。そして眼下には雲海が広がり、期待通りの初夏のお花畑を目にす

ることができました。また、思いがけず中学時分に国語をお習いした鎌田先生にもお会いすることができました。山内さんをはじめ、会の皆さん、素敵な一日をありがとうございました。

栗生 絵理子

会の皆さん、初めて参加した私に、自然や花の事を親切に教えて下さり、ありがとうございました。お陰で楽しく参加することが出来ました。今回の感想は3点です。①樹林帯の中にも木の花から、足元にある花まで、観察する物は沢山あるんだという事。②ロープ一本がお花畑を守っているという事。③これからは、自然に優しく登山道を広げないように歩くという事です。

景色がキレイだったのは、西大巔の頂上で見た雲海に浮かぶ磐梯山です。観察会に参加して、登山や自然に対して、知識や楽しみが少し増えて、大変良かったです。山頂近くの木は、芽出しの途中。大きなエネルギーを感じさせてくれました。



自然保護活動後継者の育成が急務ではないだろうか

山内幹夫

最初から年齢の話して申し訳ないが、「高山の原生林を守る会」会員の平均年齢が何歳位なのか考えられたことはあるだろうか。私は平成 13 年に入会したので、それ以前のことはわからないが、観察会に参加されている方々の大半が実年を超えられ、還暦を過ぎた方もいらっしゃることは確かである。さらに「東北自然保護の集い」にお集まりの方々もそうである。もちろん、20 代～30 代の方もおられることは確かであるが、人数割合からすると少ない。

考えたくはないが、あと 20 年過ぎた頃、自然保護活動を推進される方々が何人おられるだろうか。さらに、自然保護活動がまともに推進されているのだろうか。里山の自然は守られているだろうか。福島近辺の吾妻連峰や安達太良連峰に入山する人々を見ると、中高年の方々に比べて若者の姿が少ないことが以前から気になっていたが、この問題は杞憂ではないような気がしてならない。

何も自然保護に限ったことではなく、埋蔵文化財保護や民俗芸能など無形の文化財保護にしても、考古学や民俗学を大学で学んでも、卒業後は研究を続けない学生がほとんどで、福島県民俗学会などは後継者がほとんどおらず、将来存続の危機に瀕しているという話を耳にした。やはりフィールドを歩いて汗をかく地道に活動（研究）する分野には若者は魅力を感じないのであろうか。

誤解を恐れずに言うならば、僕らは高校や大学において全共闘時代を経験し、それぞれ立場は異なれど、多少なりとも「モノ」を考え、一時期は反戦フォークに浸った世代である。それにひきかえ、現在の若者達の多くは「本を読み」考えるよりも「ビジュアル」な感性で生活を楽しむ生き方に変わっているような気がする。

何もそれが悪いとか言っているのではない。それならそれで、「ビジュアル」な感性に自然保護の大切さを訴える方法を模索して、後継者を育成できればと考えたい。「見て・触れて・楽しんで・考え・学ぶ」フィールド学習プランにより、自然のすばらしさと大切さを感じてもらえれば、少しずつでも自然保護を目指す若者が出てくるのではないだろうか。福島県に「自然史博物館」を建てたいという目的のひとつとして、私はそのことを考えている。

「見て・触れて・考え・学ぶ」というのは私が勤めている福島県文化財センター白河館「まほろん」のキャッチフレーズで、ここに引用するのは手前味噌のようで申し訳ないが、「まほろん」には小学生以上の子どもたちで組織するサポーターズクラブ「まほろんメッツ」があり、自主的に多くの子どもたちが体験活動を行っているし、大人で構成するまほろんボランティアの方々も活発な活動をしている。そのことを日常目にして、早く「自然史博物館」を立ち上げてこのような活動を推進し、県内の自然保護団体と連携して広範囲な事業を行うことにより、少しずつ自然保護活動の後継者が育ってくれば良いと考えるようになった。

若者のボランティア意識が高いことは、救われる感がある。森の案内人事業についても、県事業のボランティアだけでなく、自然保護後継者育成を目標として、自らの意思で若者の琴線に触れる訴えを行うことが必要ではないか。さらに、県内の自然保護団体・研究団体や森の案内人・福島県立博物館などが連携して 2～3 年に一度でもいいから、子どもたち・若者向けの自然保護イベントを開催して関心を高める工夫も必要と考える。

いろいろ夢みtainなことを書いてしまったが、今できることは、当会の自然観察会に一人でも多く若者を参加させることかなと思う今日この頃である。



谷地平避難小屋の救急箱

佐藤 守

この夏の7月17日に久しぶりに谷地平を訪れた。湿原はオオカサモチやシナノキンバイ、イソツツジ、カラマツソウ、キンコウカ、ミヤマリンドウ、モミジカラマツ、シロバナニガナ、コバイケイソウなどの夏の花が咲き競っていた。鎌沼から姥地蔵を過ぎ針葉樹林帯に入ると入山者も少なく、溪流釣りの帰りと思われる3人とこの日は何か自然観察のイベントがあったのか、おそろいのワッペンをつけた集団に出会ったぐらいであった。

湿原の散策を堪能した帰りに谷地平避難小屋に設置してあるはずの救急箱を思い出し、小屋に寄って救急箱を探した。入口脇の観音開きの扉がついた戸棚に救急箱があったのだが、最初はそれとは認識できず、しばらくしてその状況を理解して愕然とした。何と救急箱は蓋が壊され、その中に日本酒の三合ビン2本とペットボトルが入れられていたのである。この救急箱は私が所属していた山岳会の事業で包帯等の薬以外の救急用具を入れたものを昨年(2004年)に吾妻・安達太良連峰の避難小屋に設置したものである。

戸棚の前には大型のゴミ袋が満杯状態で、この中にもペットボトルなどが外のゴミと一緒に入っていた。救急箱の一件は他人の迷惑を考えない行為であり、ゴミ袋の放置の件は誰かが始末してくれることを前提としている行為である。いずれも「自己責任」を前提とする登山行為とは相いれない行為である。特に救急箱に対する所作は登山者のモラル以前の社会的にも許せない悪行であり、登山を愛好する人間ではない者の行為ではないかと思わせる。

同日、吾妻小舎のご主人にこの件を話したら、最近では花の盗掘などを注意すると逆切れする者が多く、身の危険を感じることもさえるという。避難小屋にまで監視カメラの設置が必要な時代になったということなのだろうか。外国人が日本に来て驚くことは農産物の無人販売ボックスや自動販売機が存在であるというが、そのような日本人の気質がいつまで持続可能なのか一抹の不安を感じた。



蓋が完全に破壊されている

森の仲間達

ブナ林に棲むセミ「コエゾゼミ」

磐梯山観察会では、花のほかいくつかの昆虫類も観察できました。観察会の後日、富田國男さんから「エゾゼミ」と「コエゾゼミ」の識別法についてアドバイスを頂きました。調べてみると実に面白いと思いましたのでここで紹介します。

「エゾゼミ」、「コエゾゼミ」とともに北海道、東北に生息するセミですが、「エゾゼミ」は主としてアカマツ林やスギ・ヒノキなどの人工林に棲み、「コエゾゼミ」はブナ林に生息します。どちらも背中に「マクドナルド」マークを持っています。このマークの頭側についている黄色い条線で「エゾゼミ」、「コエゾゼミ」の違いが分かります。写真のようにこの部分が切れているのが「コエゾゼミ」です。

「コエゾゼミ」は春の「エゾハルゼミ」と同様、東北のブナ林に生息する代表的なセミの仲間ですので、覚えておきたいものです。なお大竹力さんのブログ(磐梯山の力



コエゾゼミ

(○の部分が切れている)

<http://inawashiroko.cocolog-nifty.com/chikara/>) の8月31日付けでも紹介されています。